

月刊

いのちのとも

第七卷

十二月号

神は義と愛

キリスト教では

神は

義であり愛である

とされる

それは

意識の水準では

「他己」の

人格であり

感情である

でも

それが

実践できるには

「自己」に

それらを

体得しなければならない

無意識の水準で

自己と他己を

統合しなければならない

人生を考え直して

みたい人は(三六)

『聖書』解説(一一二)

マタイ福音書の第五章を続けます。

二一昔の人々に、「人を殺してはならない。人を殺す者はさばきをうけなければならない。」と言われてたのを、あなたがたは聞いています。

二二しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かつて腹を立てる者は、だれでもさばきをうけなければなりません。兄弟に向かつて「能無し」と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、「ばか者」と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。

二三だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思出したなら、

二四供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。

二五あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢にいられることになります。

二六まことに、あなたに告げます。あなたは最後の「コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません。」

前月号の、最後の二一節は次のようでした。「まことにあなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に入れません。」

今月号で取り上げます部分は、この二一節の「律法学者やパリサイ人の義にまさる義」がどんなものであるかを示すものです。それは、実は、先月号でも取り上げましたが、五章の最後の節である四八節の「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」まで続きます。

ここは大切なところですので、先月号の復習を少ししておきますと、いま述べました「律法学者やパリサイ人の義にまさる義」とは、「天の父が完全なように、完全

である」ことでした。

でも、あらゆる人が、誰でも「完全である」というようになれるかと言いますと、正直なところなれないのだと思います。でも、なれなくても、あるいは、なれないからこそ、大切なことは、そうなった人の言うことを、心の底から真実と信じ、それに則って、ひたすら、そうなるうと努力することです。具体的には、戒律や律法を守り、毎日欠かさずお祈り（瞑想・ヨーガ）をし、その人の教えを学んでいくことです。怠りなくそうしているとき、人は無限にその人と同じ「完全さ」に近づいて行くことができるのです。

さて、復習はこれぐらいにして、今月号で取り上げました部分で、難しい言葉ですが、最高議会、燃えるゲヘナ、一コドラント、などがあります。

最高議会は、宗教的な問題の裁きをする議会で最高裁判所もかねたところですよ。

燃えるゲヘナは、地獄のことで、仏教でいえば、例えば、焦熱地獄とも言えるものです。

一コドラントは、その当時の貨幣の最小単位で、日本で言えば一円ということになります。

これらのことを念頭において、順次、検討して行きたいと思えます。

まず、はじめの「人を殺してはならない」という二一節ですが、これは、それまでにユダヤ教で言われて来ましたが、いわゆる律法に当たります。そして、続く二二節から最後の二六節までは、その律法を超えた「完全さ」によってもたらされるものをあげてあります。

内容ですが、兄弟に腹を立ててはならないことを述べています。もしそうするものは、さばきを受けたり、宗教裁判にかけられたり、地獄に投げ込まれたりすると言っています。また、告訴するものとは、直ぐにも仲直りすべきことが述べてあります。

これらは、要するに、たとえ人を殺さなくても、ただ腹を立てただけで、殺したと同様に裁きを受けるということです。

でも、世間に、兄弟喧嘩は日常茶飯事のことですし、また、訴訟も絶えません。大多数の人は、しょっちゅう腹を立てています。それを殺人と同様に処罰したら、処罰されない人を探すことが難しくなると思えます。

キリストは、なぜ、こんな現実離れたことを言うのでしょうか。これが本当に何を意味しているのか、普通、なかなか理解できません。多くのキリスト教者は、当のキリストさえもが、パリサイ人には腹を立て、攻撃している例をあげています。また、そうしたキリストの立腹

は、他者への愛に基づくものであるから、ここでいうのとは異なり、決して矛盾するものではないことを述べています。そして、私たちもキリストの愛によって、たとえ腹を立てても許されるとしているのです。

ここで、これを理解しやすくするために、仏教ではどう考えているかを見てみたいと思います。

ご存知のように、仏教には為してはならない戒め（律法）として十善戒があります。それは、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見、です。からは、「身」で為すもの、からは、「口」で為すもの、からは、「意（こころ）」で為すものです。

私が提唱しています「人間精神の心理学モデル」で言いますと、身は「からだ」つまり「感覚 運動」という精神の働きで為すもの、口は「あたま」つまり「認知 言語」という精神の働きで為すもの、意は「こころ」つまり「情動 感情」という精神の働きで為すものです。

そして、仏教では、こころで為す三つを貪瞋癡（とんじんち）の三毒と呼び、からだやあたまでなす悪の根本であるとして、重視しています。因みに、貪は、むさぼること、瞋は、腹を立てること、癡は、こころに宇宙の根源原理を悟らないこと、です。こういふこころがあり

ますと、いくらあたまやからだで為す悪を為さないでおうと思っても、為してしまうのです。殺すな、盗むな、邪淫を犯すな、嘘をつくな、悪口を言うな、と言われてみても、守ることはできないのです。外見的・形式的に守っているようでも、それは、いつ破られるか分からない不安定なものと言えるのです。

聖書でキリストが言っていることも、このことを言っているのです。いくら殺すなといってみても、こころが伴わなければ、いつ破られるかわからないのが、律法のさだめだ、ということなのです。

しかし、ここで注意しなければならぬのは、こころもまた、いやこころこそ、自分の思いどおりにはならないということなのです。貪瞋癡が悪の根本だから、それをなくしようと思っても、直ぐにできることではないのです。これまでのキリスト教で言いますと、神が愛するように、自分も隣人を愛そうと思っても、その通りできるものではないのです。そのことは、これまでのキリスト者の歴史が証明しています。

一般の人でも、例えば、心は丸く、腹は立てず、気は長く、しようと思いを立て、色紙か何かの紙に、心という字を丸く書き、腹は立てないようにと寝かして書き、気は長くと伸ばして書いて、毎日まいにち、朝昼晩三度

拜んでいても、なかなかその通りにすることはできない
ものです。

実は、それはキリストのように「完全」にならなければ、
そうなることはできないのです。

では、完全になるには、どうすればよいのでしょうか。
それは、既に述べましたように、キリストを信じ、キリス
トの教えを信じて、言われる通りにそうなるうと努力
することなのです。「あなたがたは、天の父が完全なよ
うに、完全でありなさい。」と言われる通り、完全にな
ろうとして、ひたすら努力することなのです。

私の理論で言いますと、瞑想やヨーガを通じて、無意
識の自己（生命意識）と他己（如来意識）が統合できる
よう、修行（瞑想・ヨーガ）することなのです。

はじめの辺りで述べましたが、多くのキリスト者は、
「キリストさえもが、パリサイ人に腹を立て、攻撃して
いる」のだから、私たちも、できなくて当たり前で、あ
あ言われたからとて、腹を立ててもよいのだと思ってい
たり、たとえ腹を立てても神の愛で許されると考えるよ
うですが、それは、キリストを理解しない人たちの勝手
な思い込みです。

先月号の最初に出てきましたように、一七節ではキリス
トは次のように述べています。「わたしが来たのは律

法や預言者を廃棄するためだと思つてはなりません。廃
棄するためではなく、成就するために来たのです。」と。

この言葉の通り、キリストが、パリサイ人に腹を立て
て攻撃したのも「律法」にかなったことなのです。彼が
したいことは全てが律法にかなっているのです。完全な
人がなすことは全てそうなのです。

でも、完全でない人は、どこかに執らわれがあります
から、腹を立てればかならず悪を為してしまうのです。
ですから、キリストが言われる通り、完全でない人は腹
を立ててはならないのです。

また、大多数のキリスト者は、悪を為しても、神の愛
で許されると考えるようですが、そんなことを考えて、
居直つていたのでは、この世は、悪がどんどん累積して
いきます。ユダヤは、何千年も前のことでも、未だに許
していません。神と同様に許すべきですが、そうはでき
ません。また、歴史は、キリスト教がどれほど戦争をし
て来たかを示していますし、現在もキリストの教えを破
つて宗教のために殺し合いをしています。イスラムも方
々でテロを行っています。仏教も、釈尊の教えを破つて、
太平洋戦争のとき、積極的に戦争参加を奨励した宗派が
ありした。キリストが言われる通り、腹を立てないよう
に、どこまでも努力しようではありませんか。

自作詩短歌等選

他己がない過去がない

他己が
垢で汚れている人は
自己が
客観化できない
だから
過去がなくなる
過去の記憶は
自分の都合の
よいように
変わっていく
有ったことを
無かったといい
無かったことを
有ったという

生活のために

障害児が
生活できるとは
社会へ適応できる
ということなの？
障害児は生活の
ために生きている
のではない
ただ
あるがままにある
だけ

みんなばらばら

一人ずつ
みんなばらばら
民主主義

思想は残る

老子さえ
ソクラテスさえ
ろくな弟子
もたぬけれども
今の世に
思想は残り
輝いている

原罪・如来蔵文化

他者を
私と同じく
原罪を背負った
罪深い存在とする文化
他者を
私と同じく
仏さまを内に蔵した
情け深い存在とする文化

相対に依存した幸せ

美味しいものを

食べたなら幸せな人は

美味しいものがなかったら

ら

幸せになれない

異性にもてたら

幸せな人は

異性にもてなかったら

幸せになれない

名誉があつたら

幸せな人は

名誉がなかったら

幸せになれない

財産があつたら

幸せな人は

財産がなかったら

幸せになれない

身内がそばにいたら

幸せな人は

身内がいなかったら

幸せになれない

時間の共有

時間は

人が

生きるということ

人は時間を

共有するとき

ところを

響かせ合える

愛情の補償作用

食欲は

愛情の

代替作用

攻撃は

愛情の

反動作用

性欲は

愛情の

確認作用

自分のめがね

学問も

世俗のことも

心内も

自分のめがね

通し見るのみ

他者にまかせる

自らの

生き甲斐さえも

他者に問う

釈尊のごとば（五二一）

法句経解説

（一八二）人間の身を受けることは難しい。死すべき人々に寿命があるのも難しい。正しい教えを聞くのも難しい。もろもろのみ仏の出現したもうことも難しい。

難しいことばはありませんが、でも内容は、結構難しいと思います。

まず、はじめの二つの文は、この世に生を受けるのが難しく、寿命があるのも難しいということですが、本当にこの意味が実感できるのは、それこそ、かなり難しいことのように思えます。

多くの人は、自分の生まれてきたこと、育ってきたことに、あるいは、いまのあり方に何がしかの不満をいだいているのではないのでしょうか。わが人生に不足なし、という心境にいたっておられる方がどれほどおられるのでしょうか。

そう思えるには、自分の全ての過去に感謝できなければなりません。そして、いつお迎えが来て、ありがたく行かせて頂く、と未来に起こることに感謝できなければなりません。

ればなりません。自分が死んだあと、連れ合いがどうなるのだろうか、自分の財産や名前や子孫が残るのだろうかなどと、考えるようではだめです。この偈の意味が分かったとは言えないのです。

一日生きることが、永遠に生きることだと実感できるとき、はじめて、この世に生を受けたことに感謝でき、いまの命が存在したことに限りなく感謝することができ、そのとき、それは、実に難しいことだったと実感できます。しかし同時に、それが自己の生の必然であったことも、また実感できるのです。

偈の後半の二つの文は、正しい教えを聞くのも難しいし、もろもろのみ仏の出現したもうことも難しい、というものでしたが、この最後のみ仏の出現したもうことが難しいのは、歴史的な事実として理解できることです。が、正しい教えを聞くのが難しいというのは、そうではなく、やさしいことだと思えないこともありません。例えば、いま紹介しています法句経も正しい教えですので、この文章を読む人は、やすやすと正しい教えを聞いていられると言えます。でも、ここで言っているのは、そういうことではないように思われます。

この法句経の教えを真に聞くというのは、この法句経の偈が心の底から理解でき、かつ、実行できるとき言え

ることだと思うのです。例えば、釈尊は法句経で、自分の財産にも親や子にも、自分の命にすら執着してはならない、と説かれています。でも、この教えを真に聞くというのは、この教えに従う、あるいは、従おうと精進することだと思ふのです。ただ、そうか、と行って聞き流すのでは聞いたことにはならないと言えます。

どうぞ皆さんも、親から頂いた得難い生を大切にし、一日生きることが永遠に生きることだと感じられるように、この世に悪を積まないように、そして障害児が幸せな社会が来ますように、あらゆる人が幸せになれる社会が来ますように、と釈尊の教えに則って修行して頂きたいと思ひます。

(一八三) すべて悪しきことをなさず、善いことを行い、自己の心を浄めること、これが諸の仏の教えである。

これは、有名な七仏通戒偈と呼ばれる偈です。もう何度も紹介しました。仏教のエッセンスを一言で言えば、こうなります。

この偈で大切な点は、「自己の心を浄めること」ということが含まれていることです。

どの宗教も、悪をなさず、善をなすことをすすめています。心を浄めることをはつきりとすすめることは、仏教の大きな特徴になっています。勿論、いま巻頭のシリーズで取り上げていますが、キリスト教でも「独り静かにお祈りすること」をすすめています。それが体系化されています。やはり、ヨーガの伝統のあったインドならではのものだと思えます。

では、なぜ心を浄めることが必要なのでしょう。既に、何度も述べてきましたが、人間は難儀なことに、いくら悪を為さず、善を為そうとしても、そうはできないからなのです。パウロのように、自分の精神には神が宿っているのに、肉体には悪魔が宿っていて、その悪魔が神の望まない悪をなさしめるのだということになってしまふのです。キリストはそんなことがないように、弟子たちに対し、完全になることを要求しています。それは、実は、心を磨くことによってのみ、実現できるものです。キリストで言いますと「奥まった部屋で独り静かに祈りをする事」によってのみ実現できるものなのです。

では、悪とは何で、善とは何なのでしょう。私の「人間精神の心理学モデル」で、少しこのことを考えてみたいと思います。モデルでは、「自己」は、自分を主張してどこまでも生きて行きたいとする精神の精

にあたる働きですし、「他己」は、他者を求め、他者と心を通わせて生きて行くとする精神の神にあたる働きです。私たちはこの二つの精神の働きのバランスの上に生きています。

ところで、基本的には、悪は、他己を麻痺させた、自己に閉じた行為であり、善は、自己を開き、自己を制した、他己の働いた行為である、と言えます。

ですから、真に善をなすためには、まず、自己を制することができなければなりません。しかし、何度も述べますように、自己への執着を捨て、自己を制することは、とても難しいことです。それができない人は、常に悪をなしていることに気付かなければなりません。

私の勤務する大学での、仲間たちのなす行為を見えますと、一つのことをなせば、一つの悪をなす、というほどに自己に執らわれて悪をなしています。でも、自分では逆に、善いことをなしたと思っっているのですから、救われません。末法と言わざるを得ない状態に陥っています。

善悪に関して人間を見る見方には、人間の性は善であるとする性善説と、悪であるとする性悪説とがあります。私は、人間の本性は、どちらでもありうると思いません。基本的に、人間は、自己を追求して生きていく（生

命蔵識を宿している）存在ですし、また、同時に他者を求めることでしか、幸せを感じられない（如来蔵識を宿している）存在でもあるからです。しかし、私たちのあらゆる人が、幸せになるためには、自己を制し、他者を尊重するようにならなければなりません。

（一八四）忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。他人を害する人は出家者ではない。他人を悩ます人は（道の人）ではない。

この偈も、深遠な真理を述べています。順次、見ていきます。

まず、「忍耐・堪忍は最上の苦行である。」という文ですが、とても重要なことばだと思います。

大乘仏教の実践徳目に六波羅蜜というのがありますが、それは、布施、持戒、忍辱（にんにく）、精進、禅定、智慧、の六つです。この中の「忍」が、この忍耐・堪忍にあたります。

この中でも、最も難しいのが、この忍辱の徳なのです。特に、他者から、それも自分以下だと思えるような人から侮辱されたり、馬鹿にされたりした時にじっと耐えて

いることほど、難しいものはないとされています。そのとき感じる苦しみ、ストレスの大きさは、はかり知れませんが、でも、それにじつと耐えていることは、徳を積む上で、とても大切なことなのです。

現代人には、この徳が特に欠けているように思われま
す。じつと我慢することは、ほとんどなくなつたのではないで
しょうか。不当な、いわれのない差別は許されませんが、いまは、人の善意からなされたような行為にたいしてすら、もしそれが行き過ぎててもいれば、人権を主張して、相手を裁判所に引き出しています。じつと我慢することの徳など、まったくその価値を失つてしまつて
います。「成らぬ堪忍するが堪忍」ということばは、もう死語になつてしまつたのでしょうか。それは、釈尊がおっしゃる通り、功德を積む最上の苦行なのですが。

次の「ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。」という文に移ります。ニルヴァーナとは、日本語では、涅槃とか解脱とか呼ばれます。その境地は、口で言い表すことはできません。表現しませんが、体験できない人は、その言葉に執らわれます。たとえばその境地は、「この世とかの世を捨てる」ことだと釈尊が言われますと、「この世を捨てる」のが往（おう）であり、「かの世を捨てる」のが還（げん）である

と理屈をつけて、解釈します。私には、自分の中で過去への執着も未来への執着も消えて、自他が統合され、永遠のいまを「ただ生きている」だけだとおっしゃっているように聞こえるのですが。

残つた部分の「他人を害する人は出家者ではない。他人を悩ます人は（道の人）ではない。」に移ります。

この文を読みますと、オウム真理教のことを思い出します。親が反対するのに家出をして出家をするのは、成年に達した人なら、一人の人間として、自分の生き方を自分で決める行為として、たとえ親を悩ましたとしても、許されますが、でも、宗教の名において、自分の親や信者や一般他者の自由を奪い、他者を悩ましたり、害したりすることは、許されません。

出家したいという子の生き方を、親のエゴで反対することは、反対する方が間違つているのであり、親が反省すべきだと思います。

現代人は、自己に閉じ、自己を肥大化していますので、自分が、相手を信頼もしなければ、愛情もあげないのに、相手がくれないと言って自分が悩み、自分が悪いのに相手を恨み、そして、それを相手にぶつけて相手を悩まし、悪を重ねていきます。親の子に対する関係も同じであることが多いのではないのでしょうか。

後記

- 一、今年は、寒波が来るのが例年より早いようです。急に寒くなって、向かいの山も紅葉も、もう茶色に急速に色が変わって行っています。
- 二、お墓を修理させて頂いた「大阿闍梨法印増観」さんの命日は、十二月八日でした。お供えをし、理趣経という、真言宗で重視するお経をあげさせて頂きました。
- 三、考えてみますと、十二月八日は成道会、つまり、釈尊がお悟りを開かれた日、つまり成道された日を祝って仏教寺院では、法会がもたれる日だったのです。
- 四、考え過ぎかも知れませんが、増観さんはこの日を選んで、いわゆる「成仏」をされたのではないかと思うのです。弘法大師さんが三月二十日の彼岸に成仏されたように、です。
- 五、そのことは、お墓の向きが、自分が開発された新田を見下ろせると同時に、自分の所属される仲間のお墓も、寺も丁度見渡せる位置と向きであり、また、それは、虚空蔵求聞持法を修法するときの東を向いていることなど、極めて配慮の行き届いた場所であることなどを考え合わせますと、そう思うことも不自然ではないように思われるのです。
- 六、先日、増観さんの所属していたお寺で、明治初年に

お取り潰しにあつた神護寺・城林寺の所管していた誉田八幡宮の宮司さんにあう機会がありましたので、増観さんについての資料が残っていないかお尋ねしましたところ、まったくないという答えが返ってきました。

七、増観さんにつきましては、私がいま住んでいます家の前に広がる田んぼを、前述のように新田開発され、それが見下ろせる場所にお墓を作ってもらった方だと言ひ伝えがあるだけで、それ以外は分かっていません。

今後、何か分かればいいのと思っています。

八、早いもので、この『こころのとも』ももう満七年になりました。よいお年をお迎えください。

月刊 こころのとも	平成八年十二月八日
第七卷 十二月号	〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島
(通巻 八十四号)	鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>じよんせい</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

